異文化体験を通じて自己の文化を再認識する

～国際救援活動、留学体験、日本における外国人支援からの気づきから考える～

橋本香織
Kaori Hashimoto
福岡赤十字病院

私は、これまでの自らの異文化体験を通して、自己の文化を再認識する機会を多く持てていると感じる。具体的には、看護師としての国際救援活動や、英国の留学体験、そして、自分が働く病院での外国人医療の支援を通してである。これらは、イーミックな体験と考えた。自分の体験を語り、参加者と共有することで、エティックな経験知へと変化することを期待する。

国際救援活動を通して、生きるということの意味、治療を受ける人々が医療や看護に対して期待することの違いを知る体験をした。2005 年 11 月、パキスタン北部で起こった地震の 2 か月後、日赤は病院型の緊急対応支援を行うことを決定し、そのために私は派遣された。我々が現地に入る前にも、地震直後に骨折などの外傷を受けた方々に対して、緊急医療が様々な団体から提供されていた。しかし、地震後の清潔が保たれにくい環境で、その傷に感染を起こしている方々がおられた。我々は、テントの病院で、傷の感染コントロールおよび機能回復のためのリハビリテーションを行うこととなった。ある日の夜勤で、テントの病室を巡視していると、肺炎様の症状を起こしている 60 代の女性がいらっしゃった。痰が絡み、上体を起こしておかないと呼吸が苦しいようで、寝ることが難しかった。顔色も悪く、酸素化が保たれていない様子が見受けられた。私は、吸引による気道浄化と酸素投与を行う必要性を感じ、準備をするためにナースステーションに行き、物品をもってベッドサイドへ戻った。すると、一緒に働く地元の看護師が家族とともに、その女性をアラーが迎えに来るためのお祈りをささげていた。お祈りが終了するのを待って、酸素投与を開始し、了解を得て、吸引を適宜実施させてもらった。安楽な体位を調整し、安心できるように頻回にベッドサイドに行った。朝を迎えるころには呼吸状態は安定し、穏やかに過ごされていた。その後、肺炎の診断がつき、抗菌薬の投与などの治療の結果、元気に退院することができた。退院のときにこの女性から「助けてくれてありがとう」と笑顔とともに感謝の言葉をいただいた。しかし、この体験を後からリフレクションすると、救うことばかりが医療や看護に期待することではないということや、家族とともに祈りを捧げ、安心できる環境を整えることも看護なのだと、気づいた。ほかにもいろいろ体験したことも含め、自分の感じる、考える「当たり前」は「当たり前」ではないのだと知る機会となった。さらに、国際救援活動では活用できる資源が少ない中で効率よく、効果的に医療、看護を提供することを学んだ。英国留学中には、予防に力を入れる医療体制 Choosing Health（自らが健康への選択をする）や自然治癒力を大事にすることを体験した。

国際救援などの異文化体験や価値の違いを知る体験は自分自身のことを知る体験にもなる。私は、異文化に触れるときに困惑するとともに面白さも感じる。その違和感になぜそうなるのか、そう感じるのか、何が違うのか、と興味をそそられ、納得できる説明を聞いたり、見たり、自分で考えたり、またディスカッションしたりすることで異なることの貴重さを感じる。そして、私らしさや自分の生きている文化や価値を大事に思うことになる。これらの体験を活かしながら自施設に入院される外国人患者に対して、その人の大事にしたいことをくみ取りながら看護する、患者家族の擁護者、支援者として、チームの調整役となることに努めていきたい。異文化を知る看護師としてその貴重さを一緒に働く仲間と共有したいと考える。